分チ花ヲ開ク、白色三瓣ニシテ内ニ黄蕋アリ、頌ノ說ニ四瓣ト云ハ非ナリ、一種千葉ノ者ハ鈴子(コガネ)菊花(ヌキノ)ノ如シ、コノ根狹小食用ニ堪ヘズ、只種テ花ヲ賞スルノミ、池澤ニ自生多シ、オモダカハ東醫寶鑑ノ野茨菰草、花譜ノ慈菰花ナリ、慈姑ハ花ヲ開カズ、稀ニ花ヲ開ク者アリ、其根夏秋ハ細白條ノミ、冬春堀ル時ハ塊根アリ、京師ノ產ハ、形圓ニシテ大サ七八分、或ハ一寸、皮淡青ニシテ肉白シ、皮ヲ去リ煮テ食用ニ供ス、他州ノ產ハ形大ニシテ、微長味劣レリ、一種根小ニシテ無患子(ムクロジ)ノ大サナル者アリ、マメグワヰト云フ、又スイタグワヰト云フ、攝州吸田村ニテ多ク種ヘ出ス故ニ名ク、二三月京師ニ賣ル、ハカリグワヰト云、能州ニテゴワヰト云、苗形同ジク小ナリ、一種細葉ノヲモダカ、池澤ニ自生アリ、葉潤サ三四分、長サ一尺許、花モ亦小シ、コレヲ烏羽繪グワヰト云、一名アギナシ、筑前ヲトガイナシ、仙臺其初出ノ葉岐ナクシテ、竹葉ノ長キガ如シ、故名ク、是等皆慈姑ノ品ナリ、

〔農業全書五山野菜〕慈姑

くはいは是泥中の珍物也、先たねを收めをく事、來年作るべき分量をはかりて、水を落せば、卽堅田となる所に、別にうへをき、春移しうゆる時分まで、其田にをきうゆる時にいたりて掘取、中にてふとく見事なるをゑらびてうゆべし、うゆる地の事、第一は稻は出來すぎてよからず、濁水など流れ入て、他の物は過て實りなき所を上とす、もとより稻に宜しき田なりとも、地心其外利潤をはかりて、所によりて作るべし、都或は國都などの、大邑に遠き所にては、過分には作るべからず、水濕絕ざる所の、泥深く肥たるに、糞しをも多く用ゐてうゆれば、厚利ある物なり、うゆる時分の事、三月初より四月初まではよし、耕しこなす事、稻田のごとくくはしからずしても苦しからず、凡七八寸ほど間を置て、一ツ宛芽の方を上にしてうゆるべし、臘月に水田にうへをき、來年四月苗生じて、稻をうゆるごとく種べしと、唐の書に記せり、同じく糞を用る事、稻の出來過る地に